ライデン天文臺挿話

助教授理學士　山本一清

上田樣

去る十二月八日のことでした。オランダのウトレヒトからハーグを經て、朝早くライデンに着き、霧の深い街路を縫ひ〳〵、十時頃、大學天文臺を訪ねました。臺長デ・シター氏は二日前にウトレヒトの天文臺で會つたことがありますので今日は二度目の面會であり、まことに氣持よく迎えられ、取り敢へず、暖かい臺長室に席を薦められて、暫くの間、

「オランダは可なり寒いですネ」

とか、

「此の建物は何だか非常に新しいやうですが、一體何時頃御建てになつたのですか」

と言つたやうな事を話してゐますと、氏はフト話頭を轉じて

「あなたは何時まで此のライデンに居られますか？　ナニ、今日の内にアムステルダムへ御出でになるつて!?　それは忙しいですね。ぢや、マア、御晝の御飯を一しよに食べることしませう。丁度、ジョハネスバーグのインネス教授も來てゐられますから……」

と言はれるではありませんか。インネス氏とは誠に珍らしい。御承知の通り、此の人は南アフリカのトランスヴールの天文臺にゐる人で、中々の野心に富んだ勢力家です。此の人に此の土地で出會へるのは愉快なことだと思ひました。

それから暫く、オール君（此の人は、ごく近頃まで米國のエール大學天文臺に二年間滯在して、シレーシンジャー教授の下に研究してゐた人で、僕とはアメリカで既に二回ばかり會つた事のある若い人です）の案内で、あちらこちらの室々にある望遠鏡や觀測設備を見せて貰ひ、約束の通り、正午頃、臺長室に歸つて來て見ると、そこには大きな體軀で幾分太り氣味の男が一人奥の椅子に腰を下してゐたのが、僕の顏を見るなり、立ち上つて、（臺長の紹介も待たずに）つか〳〵とこちらへ近づいて來て、

「ハウ・ドウ・ユー・ドウ・サー」

と、いきなり手を出して來る有樣。デ・シター臺長、すかさず

「インネス教授です」

こんな風の挨拶がすむと、あとは「今まで何所に居た」だの、「今から何所へ行く」だのと御互ひに、いろんな有りふれた會話を暫く交はしましたが、程なく、食堂の用意が出來たとの

知らせにより、皆一同、臺長に導かれて、隣りの室に入りました。

食堂は臺長夫人の指し圖で萬事が整のひ、一同は薦められるがまゝに席につきました。テーブルには臺長夫妻とインネス氏と僕と、其の外に若い男女（之れは臺長の子達と天文臺員の或る人々）が並びました。

すると、パンが配られ、肉が分けられ、皆の者がナイフを取つて、そろ〳〵食べにかゝるや否や、インネス氏は他人の會話を壓せんばかりの力强い聲で、

「プロフエサー・ヤマモト。貴君は私と一しよに南アフリカへ御出でになりませんか？　私は二三日の中に英國へ歸つて來週の木曜日にサウザンプトンから出帆するのです。……」と切り出されるのです。僕は話が餘り突然なので、少々面喰つてゐますし、一座の人々も可なり意外な樣子でしたが、インネス氏は續け樣に

「貴君は今スエズ地峽を通つて日本へ御歸りの途中なのでせう。さうすれば南アフリカをまはつたつて、大した違ひにはなりませんよ。」

「いや、大變な違ひでせう。殊に距離で言へば」

「えエ。しかし、貴君は三月中に日本へ歸れば好いと仰しやつたですネ。さうすると、アフリカ廻りをしたつて、日本へは大丈夫三月までには歸れて、尙ジョハネバーグにはゆつくりと滯在が出來ますよ。英國から南亞までは毎週便船がありますし、又、南亞から東洋へも大低毎週船の便はありますから、少なくともコロンボ又はシンガポールまでは容易に行けますし、シンガポールまで行つて了へば、それから先きの日本までは又、澤山船がありませう？」

「えエ」

「それに船賃だつて大した違ひぢやありませんよ。實際スエズ運河の通過稅といふものは減法高いのだから――さうぢやありませんか？　デ・シターさん」

「まつたく、スエズ運河稅は高いですよ」

と、臺長も相槌を打つのです。インネス氏は續けて

「だから、プロフエサー・ヤマモト、決局はスエズ通過も南アフリカ廻りも大した違ひにはならないのです。――私は今度は二十六吋の望遠鏡を持つて歸るのです。これは十年餘りも前からグラブ會社に注文して置いたのが、戰爭のために延びて今漸やく出來上つたのです。此れを南亞に持つて歸つて一二週間の中に据え付けて、そして貴君に最初に南の天を觀て貰ひませう。御承知の通り、此の望遠鏡は南半球に於いて第一の大望遠鏡です。それに、私の天文臺のあるジョハネスバーグは天氣の好い事は全く世界第一で、一年に三百日の間觀測が出來るのです。――ごうです、一つ、決心してアノリカへ御出でになりませんか？　好い時機ですよ。今なら、此

のライデンのヘルツスプルング教授もあちらに滯在してゐますし、又、エールからはシレーシンジャー教授も今二三週の內に同じジョハネスバーグへ來られます。シレージンジャー教授はやはり新しい二十七吋の大望遠鏡を持つて行かれるのです。」

「シレーシンジャー教授には米國で御目にかゝり、その大望遠鏡の製作中の所を見たことがあります。」

「そ それです。其の望遠鏡が二三週間の中に私の天文臺の近くに据え付けられるのです。——私のは眼視用、シレーシンジャー教授のは寫眞用です。こうした最新式の二大望遠鏡がジョハネスバーグに据え付けられる時に、又、ヘルツスプルング教授も幸ひに居合せられる時に、日本の貴君も一しよに御出で下さるのは實に愉快なことじやありませんか？ こんな好期は決して再びありませんよ。」

と、こういふ誘ひ振りなのです。それに、御承知の通り、僕も一昨年日本を出た最初から、出來るならば南へまはつて、ケープやジョハネスバーグの天文臺を訪ねて見たいといふ心が無いでも無かつたのですから、インネス教授の誘引には可なり動かされました。

「プロフエサー・インネス。あなたの御言葉は大に私の心を惹きつけます。御深切を御禮申します。私も以前から南亞へは行つて見たい氣があるのです。それに、私はハーヴードの天文臺に居ますとき、大小のマゼラン雲の中の變光星を研究した因緣があります。勿論其の研究は寫眞板によつて行つたのですが、其れ以來私は常に、マゼラン雲を一度肉眼で見たいものだと思ひつゞけて居ります。」

と、僕がぢようだん交りに言つたと思つて下さい。インネス教授は益々乘り氣になつて。

「だから言ふんです。ヤマモトさん。それぢや、是非、アフリカへ來ると御決め下さい。——私は來る金曜にロンドンに歸ります、それから暫く滯在して、來週の木曜には出帆するのですが、餘り急の事のことですから、船室の手續きやら何やら、貴君が間に合はないといふ御心配があるならば、決して御遠慮に及びません。英國ローヤル天文學會あてに、私へ御手紙を一本下されば、御乘船は總て私がロンドンで濟ませて置きませう。——尤も、是が非でもと申すのではありません。しかし、考へて御覽なさい。南亞へ御出でになるのに、こんな好い機會は又とありませんヨ！」

こうして、御晝御飯をたべてゐる間、他の人々の會話は皆打ち消されて了つて全部はインネス氏の執こい誘引に費されました。

まもなく、時間が來ましたので、僕は臺長始め多くの人々に別れを告げ、ステションへ行かうとしますと、又もや、インネス氏は

「私も、ステシヨンへ、ロンドン行きの切符を買ひに行きますから一しよに行きませう」

と、七八丁もある道を、歩みながら、尙も、アフリカ行きの船の安全なこと、南天の美しいこと、船賃や諸費用の概略の胸算用など、こまゝ〳〵と話しつゞけました。僕は最後に、

「今、確かな御返事の出來ないことを御許し下さい。パリに居る妻に相談をしまして、何れ何とかの手紙を差し上げますから」

と言つて別れました。(僕は其の時オランダを獨り旅びしてゐたのです。)

考へた末、やはり今回のアフリカ行きは斷念しました。何と言つても豫定以上の費用が多く要るのと、尙又、スエズ通過の歸朝計畫が餘りに確定し過ぎてゐたからです。それにしてもライデンの半日に、思ひ掛けなくも會つたインネス教授の印象は强いものでありました。

ちなみに、インネス氏は南半球に於ける天文臺の怠業ぶりを非常に奮慨し、大に心ある者の奮發を希望してゐられました。同時に又、日本の諸天文臺にも大なる責任あることを訴へ、

「日本は特殊な經度を持つてゐるが故に、如何なる種類の天體觀測も大なる價値があることを知つて頂きたいものです。濠洲の諸天文臺が今眠つてゐるのは誠に殘念にたへません。」

三〇

などと言つてゐられました。此うした點など、以前から僕の主張してゐた所と全く合致するものです。日本は其の經度の故に益々實際觀測を勵まなければなりません。

(一九二四・一二・二〇)

天文同好會總會

大正十四年四月十八日

於學生集會所(三高南隣電車は熊野にて下車北約二町)

午後二時より講演

歐米天文視察談　山本一清

報告及幹部改選其他議事午後五時より有志會食(會食希望の方は十五日迄御一報被下度候尙當日食費約一圓五十錢持參の事)